

先週私たちは、「悔い改めによる信仰の継承」ということを見ました。私たちの救いは、「すでに与えられたもの」であると共に、「いまだ完成していないもの」であるゆえに、私たちはこの世にあって霊的葛藤を日々覚えるわけです。そして、その中で失敗することもあります。つまり、主に対して不信仰、不従順といった罪を残念ながら犯すわけです。でもだからこそ、主は聖霊とみことばによる助けを約束して下さっています。私たちが悔い改めによって、いつも主に立ち返り、主と共に歩むことができるためです。ですから、悔い改めは、不信仰の表れではなく、それは信仰があることの表れといえます。

では、どうですか？先週、ダビデの悔い改めを通して、主が喜ばれるいけにえは、表面的で、形だけのものではなく、砕かれたたましい、悔いた心であることを学んだわけですが、主はなぜそのようないけにえを受け入れて下さるのか？言い方を変えると、なぜ私たちは主に悔い改めることができるのでしょうか？私たちが謙遜だからですか？罪が示された時、それを悟り、へりくだる力を私たちがもっているからですか？それは、主がへりくだったお方、実にあわれみ深く、忍耐深いお方だからです。神様が、御子によって、つまり、主イエスがあの十字架で成し遂げられた身代わりの死、その贖いによって、私たち罪人を赦して下さっているのです。私たちは悔い改めることができます。すでに主の赦しが、私たちの前に差し出されているからです。

この主の赦しを理解し、そして、その赦しの中で日々生かされることが、信仰を継承していく上で欠かせません。なぜなら、それがわからないと主の恵みの意味もわからないからです。私たちは、主の赦しを通して、本当の意味で、他者をあわれみ、赦すことができます。ですから、今日のみことばを通して、お一人ひとりが、主の赦しについて、そのすばらしさを再発見することで、感謝と喜びに満たされ、主に対する信仰と愛をさらに深められることを心から願っています。

さて今日の箇所を見ていきますが、主は、ペテロにこう告げられました。31節「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました」。皆さん、このことは何を意味しているのでしょうか？ここには「麦のように」とありますが、麦がふるいにかけられる場合、それは、脱穀した麦を、実の小さなものやクズと、良い実とに分けるためだそうです。つまり、麦は不純物を取り除くためにふるいにかかけられます。

では、そのように弟子たちがふるいにかげられるとはどういうことでしょうか？それは、彼らがこの後、信仰の試練に遭うということだと思います。そして、麦ならば不純物が取り除かれて、良いものが残るはずですが、弟子たちの場合は、その試練を通して彼らの本当の姿、つまり、主を裏切る自己中心な罪人としての姿が明らかにされるのです。ですから、主は続けてペテロにこう語られました。32節「しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」。

主イエスをして、ペテロのために、彼の信仰がなくならないように祈られたということは、この後、ペテロは信仰を失いそうになるということです。また「だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」ということばも、そのことを裏付けています。つまり、ペテロは、立ち直る必要がある状態にまでこの後追い込まれるのです。そして、それは他の弟子たちも同様で、彼らは立ち直ったペテロによって力づけてもらう必要がある、と主はおっしゃいました。

このところから、主イエスについて二つのことを見たいと思います。一つ目は、主はすべてのことをご存知だということです。主イエスは、この後、捕らえられ、苦しめられ、十字架にかけられ、死に至ることをすべて知っておられました。そして、その過程で、弟子たちがご自分を見捨てて逃げていくことも知っておられたのです。その上で、主はご自分の方から十字架の道を進んで行かれました。

もう一つのことは、ペテロを始め、ご自分を裏切る弟子たちに対して、主イエスは怒っておられない、ということです。もし私が、主のように、自分の信頼する人が私を裏切ると知っていたなら、きっとその人に対して怒りを燃やしたと思います。そして、理由がどうであれ、なかなかその人を赦せないと思うのです。ところ

が、主イエスは、その裏切りによって、本当は傷つくはずのご自分のためではなく、ご自分を裏切る弟子たちのために祈られました。彼らのため、特にペテロのため、彼の信仰がなくならなうようにです。

では、そのように言われた主イエスに対して、ペテロはどう応答しましたか？33節「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております」。このことばは、弟子をもつ立場にある人なら、誰もがうれしくなるものだと思います。では皆さん、ペテロは、このことをただ主イエスを喜ばずため、つまり、調子よく、口先だけで言ったのでしょうか？私は、これがペテロの本心、心からのものであったと思います。ただ残念ながら、彼にはそれを実行に移すことができなかつた。それゆえに、主がそのすぐ後、彼に語られた通り、ペテロは主を三度否んでしまうのです。

34節「しかし、イエスは言われた。『ペテロ。あなたに言いますが、きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言います。』」。ここで心に留めたいこと、それは繰り返しになりますが、主はここまで具体的に何が起こるかを知っておられた、ということです。そして、その上で、すでにペテロを赦し、彼が立ち直るため、そして他の弟子たちを力強めるために、彼のために祈られた、ということです。主のあわれみの深さ、その愛の大きさを思われずにはおられません。

ただ、このように主から言われたペテロとしては、ショックが大きかったことは間違いないでしょう。というのも、今日の箇所のおすぐ前を見ると、ペテロがなぜこのように言ったのか、そのヒントを得られるからです。主イエスは、弟子たちと過越の食事をされた後、このように言われました。20-22節「食事の後、杯も同じようにして言われた。『この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。21 しかし、見なさい。わたしを裏切る者の手が、わたしとともに食卓にあります。22 人の子は、定められたとおりに去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はわざわいです。』」。

またその後、弟子たちの間で、だれが一番偉いかといった論議が起こりますが、主はこう言われました。25-30節「異邦人の王たちは人々を支配し、また人々の上に権威を持つ者は守護者と呼ばれています。26 だが、あなたがたは、それではいけません。あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者のようにになりなさい。また、治める人は仕える人のようでありなさい。27 食卓に着く人と給仕する者と、どちらが偉いでしょう。むしろ、食卓に着く人でしょう。しかしわたしは、あなたがたのうちにあって給仕する者のようにしています。28 けれども、あなたがたこそ、わたしのさまぎまの試練の時にも、わたしについて来てくれた人たちです。29 わたしの父がわたしに王権を与えてくださったように、わたしもあなたがたに王権を与えます。30 それであなたがたは、わたしの国でわたしの食卓に着いて食事をし、王座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。…」。

このように主は、「ご自分を裏切るような人間はわざわいだ（のろわれている）」と言われ、でも「あなたがたこそ、わたしのさまぎまの試練の時にも、わたしについて来てくれた人たちです。…あなたがたは、わたしの国でわたしの食卓に着いて食事をし、王座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです」と言われました。そして、今日の「シモン、シモン」とペテロの名を呼んで、まるで彼がその裏切る張本人かのように言われたのです。しかも、「わたしは、あなたの信仰がなくならないように祈った」と。当然ペテロとしては、「自分が主を裏切るはずがない。主といっしょなら、私は牢でも、死でも覚悟ができてる」となるわけです。

私たちは、この時、主が言われたのが、ペテロではなく、イスカリオテのユダのことであったのを知っています。ユダヤ人の指導者たちに、お金で主を売り飛ばしたのは間違いなく、ユダです。ただユダのように、率先してではなくても、受け身の形で、ペテロが主を裏切ったのも事実です。そして、他の弟子たちも主を捨てて逃げてしまいました。彼らもまた主を裏切ったのです。では、どうですか？皆さん、あなたは彼らのことを、特にペテロのことをどう思いますか？あのように強がった後で、主を裏切るなんて、ただの調子のいい人、勢いだけの人だと言いますか？それゆえに、彼を愚かな罪人だと断罪しますか？

私は、このように主に対する心（思い）はあっても、それを実際に行う力がなかつたペテロのうちに、主を離れては、何もできない無力な自分の姿を、主の助けなしには、神様ではなく、どこまでも自分自身を選んでし

もう自己中心な自分の姿を見るのです。それゆえに、ペテロのように、いや彼以上に、自分が主のあわれみ、主の赦しを必要とする者であることを覚えずにはおられません。皆さん、あなたはいかでしょうか？

なぜ主イエスは、ご自分を裏切るペテロをお責めにならなかったのか？なぜ主は、弟子たちの罪を指摘するのではなく、彼らを力強めることをペテロに語られたのか？それは、ペテロと弟子たちに必要なのが、赦しであること、つまり、神様の恵みであることを主が知っておられたからです。ですから、ご自身は、ペテロと弟子たちのため、そして私たちのために、十字架の苦難の道を歩み、ご自身のいのちをもって私たちの罪の代価を支払って下さったのです。私たちが悔い改めて、主を信じるだけで赦されるため、救われるためです。

私たちがまた、この地上での歩みにおいて、弟子たちのように、麦のようにふるいにかけられることがあります。今そのただ中を通っている方がおられるかも知れません。試練を通して信仰が揺さぶられる時、私たちの本当の姿が明らかにされます。そして、それはペテロのように、神ではなく、自分自身を愛する罪人としての姿です。そのような自分と向き合うことは、誰もしたくありません。誰も自分を本当の意味で、罪人とは認めたくないのです。それよりか、他者との比較の中で「自分はマシな人間だ！正しく、良い人間だ！」と思いついでいるほうが楽だとサタンは誘惑してきます。

でも、騙されてはいけません。私たちは誰も大丈夫ではないのです。すべての人は、主の赦し、主の救いを受けることなしに、罪とその結果である永遠の滅びから逃れることはできません。もし今日、あなたが主の十字架の意味を理解していないのなら、主に赦されているという確信がないのなら、またそこに主への感謝と喜びがないのなら、決して大丈夫だと思わないでください。主に赦された人は、主を愛する者となるからです。十字架の死後、三日目によみがえられた主イエスは、ペテロにこう尋ねられました。「あなたはわたしを愛しますか？」と。そこには他の意味も込められていますが、今私が皆さんに聞きたいこと、それは「主イエスを愛していますか？」ということです。主を救い主と信じているだけでなく、自己中心な罪人のあなたのために苦しみを耐え、十字架にかかって死んで下さった主イエスのことをあなたは心から愛しておられますか？

その裏切りにも関わらず、主がペテロと他の弟子たちを赦されたのは、また信仰をもった後、不信仰、不従順といった罪を犯す私たちを赦し続けて下さるのは、その赦しを通して私たちをご自分のもとへと近づけるためです。その赦しの中で、私たちが主との愛の関係を喜ぶ者となり、この方のすばらしさ（恵み）を進んで証する者となるためです。ですから、パウロは、彼の最後の手紙とされるⅡテモテ 4:8 でこう語っています。「今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです」。

この「主の現れを慕っている者」の「慕う」とは、ギリシャ語では「愛する」という意味の「アガパオ」、そして、英語（ESV）では「LOVE」と訳されています。誰が主の現れ、つまり、主の再臨を愛するのですか？それは、主イエスを愛する人、主が再びこの世に戻って来られることで、この救いが完成し、永遠に主と共に生きることを待ち望んでいる人ではないですか？では、どんな人が、主の持ち物や主が何か自分の願いを叶えてくれることではなく、主ご自身を愛するのですか？それは主によって赦された人です。多く赦された人は、多く愛するのです。主に赦された人、その赦しを恵みとして受け取っている人は、主イエスを愛するようになります。信仰の継承、それはそのような人によって、主の赦しを必要としている人々へなされるものです。